

## 日本仏教と一アメリカ人仏教研究家の接点

——『唐代の仏教』の発刊に因んで——

スタンレー・ワインスタイン

ここ駒沢大学で講演する事は身に余る光栄でございます。

実は今日の講演は少数の人々の前に、つまり二十人か三十人の聴衆があるだろうとエラく誤解致しました。二、三分前この講堂の中を覗いてみれば、大勢の方々が集まっていて、びっくり致しました。こんな大勢な方々の前に何等のノートもなしに外国語、つまり日本語で講演をするのは無謀なこととも思います。今年の四月、私は『唐代の仏教』という本を出しました。早速駒沢大学の同級生や友人に献呈本を贈りました。駒大の吉津先生は前から知っているお方ですが、勿論、自分の本を一部送りました。その時の手紙に「六月日本へ行きますが、若しお暇でしたら二人で渋谷あたりで一杯飲もうか」まあそのような手紙を出しましたけど。折り返し返事が来て、「一杯は結構ですが、ワインスタインは駒沢大学で唐代の仏教について、つまり本のテーマについて何か講演して

くれないか、そして日時は六月十五日、四時からという、全く予期しなかった御招待を受けました。吉津先生のお手紙が着いたのは、私が発する三日、四日前位なものでした。ですから正式な講演を準備する時間が全然ありませんでした。出発三日前と申しますと、荷物の整理、荷造りなどで天手古舞いでしょう。唐代の仏教についての講義を準備する暇が全然ありません。また、赤提灯で友人と日本語で喋べる事が出来ても、大学の講堂で日本語で講演をするほどの語学力は全然ないんです。だからちょっと無理じゃないかと思いましたが早速断りの手紙を出そうと思いましたが。しかしよく考えますと去年大正大学に引っぱられてこういふ講演をしたことがありますから、母校の駒沢大学を断ったらそれは失礼になるんじゃないかと思って結局渋々承諾しました。しかし、手紙で説明したように、自分の最近出した本は唐代の仏教をテー

マにはいますが、駒大の先生方の前でこのテーマについて日本語で講演する勇気がございませんので、唐代の仏教というテーマを止めて、そのかわりに私はどの経路を経てこの本を書くようになったか、まあそんなテーマなら講演をしてもいいとの御返事をしました。

駒沢大学に入ったのは昭和二十九年でした。その時は私は日本語はまだあまり出来ませんでした。日本人なら、英語は中学校三年、高等学校三年、大学は少なくとも二年、ですから全部合わせて八年位やるでしょう。アメリカは当時（昭和二十年代）日本語の勉強はそんなに進んでいませんでした。ニューヨークに育った私は、日本人の知り合いがなく、生きた日本語を耳で聞く機会が全然ありませんでした。でも若い時から日本語に随分興味を持っていましたので、単語も漢字も幾らか覚ええました。朝鮮動乱が勃発したのは昭和二十五年でしたが、私はその二年あと、徴兵に取られ、韓国へ派遣されました。その前日本語を勉強した私には、動乱中の韓国派遣は不幸の中の幸というか、韓国の古本屋で日本語の本を沢山買うことが出来て、また、当時、流暢な日本語の喋られる韓国人と親しくなり、大変いい勉強になりました。そのおかげで日本語の会話力が幾らか身につきました。でも、駒大に入りました時、先生方の講義を理解する力は未だありませんでした。もう一つの難関は、仏教についての私の予備知識は

皆無に近い、ということでした。アメリカで独りで日本語を勉強した時、日本の歴史、文学、社会についての本を読み、仏教思想や作法がどんなに深く日本の伝統的な文化に浸透しているのかに気付きました。ですから若し日本人の心を本当に理解したいならば、日本の仏教を知らなければならぬ、と考えました。ですから、兵役が終了すれば、日本の大学で仏教を正式に勉強する方が一番いいじゃないか、との結論に達しました。

また、その時、つまり昭和三十年頃、禅の思想はもの凄いいろんな人がありました。その時はやっていた禅は、主に鈴木大拙先生の紹介した臨済禅で、道元禅師の曹洞禅は殆んど知られていませんでした。禅は当時欧米に大いに話題になっていたので、私は日本で禅を勉強することに決めました。駒大はいうまでもなく禅の研究を専門にやっている大学ですから、じゃ駒大で勉強しようと決心、入学願書を出しました。

入学手続きが順調に運び、昭和二十九年四月仏教学部禅学科の一年生として駒大に入りました。私は、日本の大学の一年生になったとはいえ、日本語の会話の問題もかなりありました。というのは、漢字が大体読めても、会話が未だ自由ではありませんでした。それから仏教の知識もあまりないので、最初の一年が非常に苦しかったです。その時、もう亡くなられました、保坂玉泉先生と増永靈鳳先生が私に非常に

親切にして下さいまして、その先生達の下に仏教の正式な勉強を始めました。他にも山田靈林先生、樽林皓堂先生、小川弘貫先生、衛藤即応先生、水野弘元先生、鏡島元隆先生、光地英学先生はその時代の教授陣で仏教学、禅学の大家でした。今から顧みますと、非常に優れた教授陣で、そんな偉大な先生方の下で勉強したことは身に余る光栄という他ございません。しかし、その反面、当時日本語の弱かった私には未だ例の言語の問題がありました。一つはお名前は申しませんが、或る先生は凄いなまりで講義をなさったんですよ。また東北、ズーズー弁の先生もおられたんですけどね。標準語の未だ充分に出来ない私にはなまりのある講義ならどうしようもありません。またもう一つの問題はある先生が非常に早くしゃべるでしょう、或いは黒板にくずし書きの字を書くでしょう。そして私は一生懸命にノートを取ろうとしたんですが、ノートを取ったら次の言葉を聞きそこなっちゃったんです。だから自分でノートを取る事が無理となり、同級生、つまり今の平井先生、岡部先生に頼んでノートを貸して頂いたことがございました。同級生のノートが全部くずし書きで書いてあったので、それを解読することも一つの勉強になりました。とにかくああいう中途半端な勉強をやって一年過ぎました。前に申しましたように私は禅の勉強をしようと思って、駒大に入りました。駒大は曹洞宗の大学ですから、道元禅師の

『正法眼蔵』の拜読で仏教の勉強を始めようと、安直に考えました。ですから、一年生の時に「行持の巻」を読み始めました。もう三十年以上も仏教を勉強して来た私は、今でも「行持巻」を非常に難しいものと考えていますが、その時は私が勉強しても勉強しても意味が全然解らなかつたんです。三十二年駒沢を卒業してから、多数の非常に役に立つ参考書が出版されました。例えば、諸橋轍次先生の「大漢和辞典」のような貴重な辞典があります。私の学生の頃は勿論なかつたんですよ。塩谷先生のぶ厚い一冊の辞典があつたんですけどね。それから今は、禅学大辞典とか、正法眼蔵辞典とか、正法眼蔵索引とか、そういう本が沢山出ています。学生の頃はそういう参考書がありませんでしたので『正法眼蔵』に出た言葉、今でもはっきり覚えていますが、最初の頁に「道取」という言葉が見えています。が「道取」は「言う」の意味です。恐らく宋代の俗語でしょう。私はいくつかの辞典に「道取」を捜しましたが、どこにも出て来ません。宋時代の俗語は、今は専門的な辞書は数種類ありますが、その時代にはありませんでした。禅籍に頻繁に出てくる俗語を調べることが私には不可能で、その結果、せっかく読もうとした禅籍をよく理解することが出来ませんでした。その「行持巻」のゼミナールは駄目じゃないか、と心配しました。しかし、仏教は慈悲の宗教ですから、先生は私の不出来を大目に見て及第さ

せて下さいました。

禅籍の言語が私のような無知な一年生には、あまり難解なものですから、唐宋時代の俗語に富んでいる禅籍よりも根本的な仏教思想を勉強したら得策じゃないか、と考え、駒大の第一年が終わって禅学科から仏教学科の方に移りました。仏教学科なら、仏教の基礎的な経論を読む機会があると思っただけです。仏教学科に籍を置いた私は、各種の經典演習に参加、原人論、維摩経、などを熟読致しました。また、水野弘元先生のインド仏教史、増永靈鳳先生の中国仏教史、衛藤即応先生の組織仏教の講義に出席、大いに裨益する所がございました。

確か二年生の頃、一つの大発見がありました。大発見というのは、唯識思想の発見。丁度、二年生の時保坂玉泉先生が、『唯識二十頌』という非常に基本的なテキストをゼミで教えられました。私はそれをきっかけに唯識の勉強を始めました。唯識を少し研究すると、非常に役に立つ、実践的な仏教だと思いました。そう言えば人はびっくりするかも知れません。何故かと言えば、唯識程難解なものはない、或は唯識は一種の観念論に過ぎない、実生活とは関係がない、といった批評をよく耳にするからです。しかし唯識を實際やってみると、そうじゃないという結論に達したんです。唯識は確かに普通の漢文の知識で理解出来ない、むずかしい術語を多く

使っています。しかし、その術語の中に潜んでいる思想は人間の体験に直接関わっているんです。単なる観念論じゃないんです。唯識がどうして実用的であるかと申しますと、人間の分析、つまり人間の感情、心理、脳の回転、認識方法などを説明しているからです。それだけじゃなく、我々の生れた世界、唯識の用語を使えば、器界を心理学的な立場より分析しています。また、仏教には種々なカテゴリー、つまり範疇ちやうというものが有ります。業とか識とか智とかいうカテゴリーが多くあります。そのカテゴリーを非常に旨く整理して、体系づけているのは、唯識思想の特徴の一つです。唯識はこういう精緻な組織があるからこそ、各宗の祖師、例えば中国には、天台の智顛、華嚴の法蔵、日本には、最澄、空海、法然、親鸞、道元、などが俱舎と併せて、つまり、性相学を研究した形跡が諸文献に見えています。その点で、唯識は仏教思想の主流の一つと云わなければなりません。唯識（まあ俱舎について同じことも云えると思いますが……）の勉強を無視すれば、他の宗派の思想を徹底的に把握することが出来ません。

とにかく、私は駒大の二年生になって、そう思いましたので、唯識を専門にやったら、中国仏教、日本の仏教の基礎を理解する事が出来るんじゃないかと考えました。しかし、或る先生はこれを聞くと「いや、ワインスタインはせっかく駒

沢に来てるからやはり禅をやらないとちょっとまずいんじゃないか」と仰しゃったんです。その先生の心持ちは分らないことはなかったんです。ワインスタインはわざわざ留学生として駒大に入学して（その時代、日本には外国人留学生は殆んどいなかったんですが）、欧米に未だ紹介されていない道元禅師の思想を学ぶ機会があるんですから、道元禅を西洋に宣伝すべきだ、とのお考えでした。今は『正法眼蔵』の英訳が氾濫しています。まあその質は別問題ですが……。昭和三十年頃は『正法眼蔵』の英訳は皆無、道元禅師のお名前すら全く知られていない時代でした。ですからその先生の心持ちに大いに同情致しました。でも自分の決心、つまり駒大で唯識を勉強すること、は揺ぎませんでした。仏教をやっている人には、本当にいけないことですが、私はちょっと頑固な面もあります……。そして私を大変親切に御薫陶下さった保坂玉泉先生のお励ましがありませんので、唯識思想を卒業論文のテーマにすることにしました。保坂先生は私の第二年の時經典演習の名目で『唯識三十頌』という、伝統的唯識の一番基本的なテキストを教えて居られました。私には好都合でした。『三十頌』は短かいテキストですが先生の講義が一年間続きました。先生はその一頌、一頌に当って、『成唯識論』『述記』、『概要』、『了義燈』、『演秘』、つまり、中国の法相宗三祖の注釈書を全部参照されました。場合によっては、日本

の中世の注釈書、例えば『同学鈔』、『泉鈔』からの解釈を先生に伝えられました。そういう綿密な研究方法でしたから、僅か三十頌であったにも拘らず、一年で全部読み通すことは無理でした。私はこうして『唯識三十頌』を読んで、唯識、俱舎に興味が湧いて来て、本論、つまり『成唯識論』を是非読みたいと考えましたが、その時、駒大に『成唯識論』の講読はありませんでした。「困ったなあ」と思って、保坂先生と相談致しましたが、先生は早速、「じゃ、ワインスタイン、家に来ないか、毎週の土曜日二人で『成唯識論』を読みましよう」と答えられました。その時は保坂先生は大学のすぐ近くに住んで居られました。私は先生のお言葉に甘えて毎週土曜日欠かさずに『成唯識論』を、保坂先生の下で読みました。それは先生に大変な御迷惑だと思いましたが、御礼でも月謝でも何か差し上げたいと思っただんですが、保坂先生は「いやいや、何ですか？ 仏法を借しむ事なかれと言う事は多くの經典に出ているじゃないですか、仏法を教える事によって金を取るなんて、考えられない事、それはね戒律違反」、先生にピシヤンと言われました。非常に貴重なお言葉を伺いました。とにかく何とかかんとかやって昭和三十三年駒沢を出ました。論文は岡部先生がおっしゃったように種子思想しゅうじを取り扱ったんですが、きっと駒沢大学の図書館のどこかに埋まっています筈です。

三十三年駒沢をしまして、同級生の平井俊栄教授、岡部和雄教授と一緒に東大に入りました。東大はその時花山信勝先生が日本仏教史を担当して居られ、結城令聞先生が中国仏教を教えて居られました。花山先生のご専門は聖徳太子で、太子の思想について本を数多く出されました。先生の「三経義疏総合演習」に参加させて頂き、今でも留学生生活の楽しい思い出の一つです。結城先生は法相唯識の大家で、東大で先生はわざわざ私の為に真興僧都の『唯識義私記』を講義されたことがあり、その親切さは決して忘れません。先生は真宗のお寺出身で、唯識の外に、浄土思想の権威です。先生の『往生論註』の演習にも出席した事があり、自分の信仰はそれによって深められました。また、結城先生が繰返して強調したように、「仏教思想を理解するにはいつもその歴史的背景或いは政治との関わり合いを考慮しなければならぬ。つまり仏教思想は他の事と関係なしに成立した訳じゃありません。ですから必ず政治的影響もあるし、或いは文化の各方面、つまり、文学・芸術・哲学、その他の宗教からの影響もある筈です。言い換えれば、仏教は一種の孤立した現象ではありません。」と先生から大変意義深いお言葉を伺いました。あれから仏教思想を、勉強するに当って、いつもその歴史的背景、或はその政治的背景に注意することにしました。

駒大は四年間おりましたが、英会話を教えて生活費を賄い

ました。面白いアルバイトじゃなかったんですが、英語は自分の母国語ですから、準備なしに授業をすることも出来ましたから、割合に楽な仕事でした。あまり張り合いのある仕事じゃなかったんですが、とにかく英会話で飯を食う事が出来たんです。東大に入った頃、フォード財団の役員に出逢ったことがあります。フォード財団はアメリカで一番大きい財団で、種々な教育事業、慈善事業などにお金を寄付しています。私の留学生時代、フォードは外国、殊にアジアで勉強している特定のアメリカ人大学院生に研究費を出していたんです。そのフォードの役員は私が駒大で仏教学を専攻したことがあり、又、現在東大の修士課程の大学院生である、との事を聞いたら、私を大いに励ましてくれ、出来れば、財団からの援助も出したい、と仰しゃいました。彼がニューヨークの本部へ帰って後、財団から研究費授与を知らせた正式な通知が届きました。これで、私はもう英会話授業のアルバイトを止めても、生活費の心配もなく、フルタイムに仏教の勉強に専念することになりました。本当に有難いことでした。その役員の方は毎年一回日本を訪れたのですが、私は研究費を貰ってから一年あとで、又彼に会う機会がありました。確か東大の修士コースの二年に入った時の事ですけれど、その方は、「じゃ、ウィンスタインはいつか国に帰るだろう。」「勿論そうです。」「もしアメリカで教壇に立ちたいなら、やはりアメ

リカの大学の博士コースに入る方が良いんじゃないか？」と仰しゃいました。その時私は東大の修士課程に籍を置いていたんですが、東大の博士課程への進学も既に許可されていきました。私はもともと日本の大学から博士号を得ようと思っていましたが、フォードの方はアメリカの大学の学位が全然なければ、アメリカの大学にポストを見付けることが大変むずかしいと云って、又、アメリカの大学の大学院の博士コースに入学すれば、財団は授業料、生活費などを全部出す、と約束しました。その時は昭和三十五年、日本に来てから六年目で、日本の生活にすっかり慣れていました。日本を去ったらきっと心細い感じがすると思っていました。もう六年間日本で仏教教育を受けたこともあるし、又将来自分の国の大学の教壇から仏教を教える責任もある、と感じました。

それで、三十五年東大の修士号を得てから帰国致しました。兵隊として韓国に着いてから丁度八年ぶりにアメリカの土を踏みました。昭和三十五年頃にアメリカの大学に仏教の講座は殆んどありませんでした。今は仏教の講座は約十ヶ所の大学にあるでしょう。ハーバード・ミシガン、カリフォルニア大のバークレー校とロスアンゼルス校、そして私の現在奉職しているエール大などは仏教講座を持っています。ところが、私が帰国した三十五年、事情は今と違い、仏教講座なら恐らくハーバード大学だけでした。そういう訳

で、私はハーバード大学の博士コースで研究を続けることに決め、運よく入学が許可されました。丁度その一年前、永富正俊先生がハーバード大の助教授に任命され、ハーバードで仏教を担当して居られました。永富先生は竜谷・京都兩大学を卒業されてから、ハーバード大学の博士コースに入られました。有名なサンスクリット学者インゴールズ教授の下でプラサンパダー(『浄明句論』)をご研究なされ、ハーバード大から博士号を授与されました。永富先生がハーバード大学の助教授になられたのは多分昭和三十四年、つまり、私がハーバードに入学した前の年でしたが、私が入学したその日から、永富先生は私を大いに励まして、精神的にも物質的にも私の面倒を見て下さいました。先生から頂いた御恩は言葉で到底言い尽せません。

ハーバード大に入ると、すぐ難関にぶつかりました。フォード財団が研究費を出した時、一つの条件を付けました。というのには、私は駒大と東大で仏教だけを勉強して、西洋の哲学、宗教学を正式に学んだことではないのですから、あなたの専門は狭過ぎる、と財団の人が言いました。ですから、ハーバード大で仏教を専攻しないで、アメリカの学界に通用するもっと広い宗教学を勉強すべきだ、との条件でした。つまり、専門が仏教に限られているなら、狭過ぎると思われるので、将来大学のポストが得られない、との御心配。その条件

を見た私は、無理なことはないだろうと思い、気軽に承諾しました。ハーバードの宗教学に実際入って、関係している教授や学生に会うと、また、彼等の薦めている本を見ると、宗教学は私の今までやった仏教学と比較すれば本当に縁遠いものだなあと分りました。駒大で増永先生の宗教学の講義を聞きました。が、それは、何と云いましょるか、仏教的な宗教学で、仏教中心のテーマを宗教学の立場から分析しました。ところが、欧米の宗教学は次元が全く違い、非常に抽象的に宗教の現象を論じています。それで私は考えて見ると、こういう宗教学は私のやっている仏教学と関係が余りない、又、正直なことを云うと、興味も余り感じないので、宗教学科の席を外して、仏教学講座を置いている東アジア言語学科に身を移す方がいいと考えました。しかし、そうすると、フォード財団は私が勝手に条件を無視したと判断すれば、授業料を出すことを断わるかも知れないと心配しました。そんなことで、知り合ったばかりの永富先生と、東アジア言語学科主任教授クリーブス先生(蒙古学)のご支持を得て、ニューヨーク市にあるフォード財団の本部へ直接行って事情を細かく説明しました。財団の責任者は案外同情的で、その条件をその場で取り消しました。ハーバード大学に入ってから三日目でした。それで、ハーバードの東アジア言語学科で永富先生のご指導の下に仏教学の研究を続けることになりました。

私は駒大四年、東大二年、全部で六年間日本の二つの大学で仏教に関するコースを多数取りましたから、永富先生はハーバードでコースを取るよりも出来るだけ早く博士論文に取り掛かる方がいいと忠告されました。アメリカの常識ですが、博士号を得ていないなら、大学のポストに就くことは殆んど不可能です。ハーバードに入った時、もう三十才でしたし、又、フォード財団からの研究費はいつまでも続くものではない、との心配もありましたから、先生の忠告は当を得ていると思いました。それで博士論文のテーマを決める段階になります。が、駒大二年生の頃からずっと唯識を勉強して来ましたが、唯識を主題とする論文を書くことは当り前じゃないか、と思いました。唯識原典の英訳は全くなないので、まず唯識の古典を訳して、それに難解な唯識独特の述語を解説する脚注を付けたら、幾らか役に立つ論文になるのではないかと、まあ、そういうふうに考えました。唯識原典の英訳はないと申しましたが、実際、一九二〇年代にベルギーの著名な仏教学者バレープサン教授は『成唯識論』全文を見事にフランス語に訳したことがあり、また、同じベルギー人ですけど、バレープサン氏の弟子、ラモット教授は『解深密経』と『撰大乘論』のフランス語訳を出版しました。『解深密経』、『撰大乘論』、『成唯識論』は勿論極めて重要な経論ですが、しかし、この経論は皆インド撰述です。私は六年間日



本人の学者の下で中国唯識、日本唯識を研究する好機に恵まれましたので、どうしても欧米の学界にそれを紹介したかったのです。『述記』や『三箇疏』は中国唯識の非常に大切な注釈書ですが、伝統的な注釈書を訳するよりも唯識の概説書のようなものは唯識を欧米人に紹介するのに、一番役に立つだろうと思いました。唯識の概説書は色々あります、例えば『略述法相義』、『百法問答抄』、『法相二卷抄』、『観心覚夢鈔』などです。この書物の中に概説書として一番整理されているのは『法相二卷抄』と『観心覚夢鈔』ですが、両書は鎌倉時代の碩学、良遍僧都の著作です。『二卷抄』は、伝説によりますと、良遍が母の為に説いた唯識概論で、その特長は、割合にやさしい和文で書かれているということと、唯識のむずかしい漢文の用語は和文でどういふふうに表示されているか、まあ、この点につきましても、『二卷抄』は極めて貴重なテキストです。最近、親友の横山紘一先生は『唯識とは何か』という題で素晴らしい現代的、且つ学術的注釈を出されました。横山先生の最近の注釈書によって『二卷抄』の不明な箇所の意味が初めて明らかになって来ましたので、本当に有難い本です。

まあ、それはそれとして、博士論文のテーマを決める段階に來ますと、『観心覚夢鈔』を選ぶことにしました。その理由は幾つかありますが、一つは『観心覚夢鈔』は、注釈書が

五つほどあり、又、その注釈書の中に松浦僧梁師の七巻からなっている非常に詳しい『観心覚夢鈔講義』がありますが、『法相二卷抄』になりますと、小山憲榮師の『發揮』しかありませんでした。勿論、横山先生の見事な注釈書はその時未だ書かれていませんでした。また、『観心覚夢鈔』と『二卷抄』を比較すれば、前者は後者よりずっと詳しく、入門書の形を整えていますので、『観心覚夢鈔』の方が最適だと決めました。でも、最初はかなり躊躇しました。そのわけは『観心覚夢鈔』は明治時代から広く読まれた唯識の概説書にも拘らず、色々な点で正統唯識、つまり中国法相宗三祖と異なる教義と解釈を含めているのです。これは、勿論、その著者良遍が伝統的な教義を誤解したためではありませんでした。良遍は鎌倉時代の仏教界に育まれた人間ですから、鎌倉の仏教思想に大いに影響されました。当り前のことでしょう。鎌倉の仏教（平安仏教についても同じことも云えるでしょうが）はもう中国の模倣ではなく、日本民族の宗教的体験を反映した、日本固有の、洗練された仏教です。中国仏教が時代に應じて変容していると同様に、日本仏教も日本人の、各時代に変わりつつある宗教理想に應じて変形しているのは当然です。ですから『観心覚夢鈔』は正統派の唯識学徒に、幾ら異端視されても、それも結構だ、『観心覚夢鈔』は唐代前半期に固定した中国の唯識思想を代表する本ではなく、それよりも奈

良、平安、鎌倉の各時代を通して生きて来た唯識の入門書として欧米の学界に『観心覚夢鈔』を紹介すれば良いじゃないかと思いました。『観心覚夢鈔』を手本として日本仏教の特徴を紹介する、まあそう考えますと、『観心覚夢鈔』はもう異端の本ではなく、日本の唯識を立派に伝える本だと考え、『観心覚夢鈔』の適性についての躊躇も疑惑も消えてしまいました。

正統唯識と異なる日本独特の唯識思想が『観心覚夢鈔』に度々登場すると申しましたが、一例を挙げますと、良遍僧都の「無性有情」の見方です。正統唯識には五性各別という有名な教義があります。それによると、一切有情は五つのグループ、所謂五性に先天的に分れています。その五性は声聞定性、縁覚定性、菩薩定性、不定性と、無性の五つです。最初の三つはその名が示すように、定まった性で、その性、正式には種性、或はグループに入っている有情の運命が先天的に決定付けられています。声聞定性の人は修行を完成すれば、当然声聞果を得る、その人は決して菩薩にならない、縁覚定性も縁覚果を、菩薩定性は菩薩果、すなわち仏果を得るといった具合です。不定性の人は、簡単に云えば、種性が固定していない、場合によって声聞から菩薩へ、或は縁覚から菩薩へ、全部で四種の転向の仕方を現わしています。なお定性にしろ不定性にしろ、所謂聖果を得ることになる、つまり仏か

縁覚か阿羅漢の一つになります。問題は最後の無性の一類です。無性の人は幾ら修行しても、何辺生れ代わっても絶対に聖果を得ることが出来ない、こんな人は善を多く積んだら、生天することは出来ませんが、仏になれません。仏教は諸行無常を根本的な立場としていますから、天に生れるものはいつか人間界か地獄か餓鬼道などに生れ代わりますので、生天を究極目的にしていません。言葉を変えれば、無性の人は先天的に永久に救われない、可哀そうなものです。正統唯識によると、人が救われるか（つまり、聖果が得られるか）救われないか（無性の一類に属するか）はその人が阿頼耶識の中に無漏種子を持っているか持っていないかということになります。無漏種子は汚れ、煩惱のない種子を指しますが、仏果、縁覚果、阿羅漢果を生ずる種子です。有情はこういう種子がなければ、幾ら善行を重ねても、仏になれません、ゼロに百、千、万を掛けても、なおゼロだと同じようなことです。何という恐ろしいことでしょう。

五性各別という正統唯識の教義は中国でも問題化され、この教義を始めて伝えた玄奘三蔵はこの点で靈潤その他の学僧からかなり批判を受けたのは当然の事でしょう。大乘仏教は一切皆成、悉有仏性です。つまり一切有情は生れながらにして仏性をそなえているので、いつか必ず成仏する、という立場を取っています。法相唯識を除いて中国仏教の各宗、三

論、天台、華嚴、禪、などの祖師は一切皆成、悉有仏性の思想を肯定していたので、玄奘三蔵の伝えた五性説に反対しました。中国法相宗の祖師は理仏性、行仏性などの新説を案出し、自宗を弁護しようとしたが、結局効を奏せず、法相宗は中国本土に滅亡の一途を辿りました。

法相宗が日本に伝来されたのは七世紀（飛鳥時代）で、次の奈良時代は法相宗の黄金時代でした。ところが、平安になると、最澄は法相宗の徳一と論争し、五性各別、無性不成仏を権大乘と貶して法相宗を斥けました。平安時代に新しく成立した天台宗と真言宗は破竹の勢いで日本全国を覆い、法相宗の法燈が辛うじて奈良の興福寺や東大寺あたりで続いています。『観心覚夢鈔』の著者良遍は当時の法相宗の衰微した状態を如実に描写しています。

「他家の門葉……諸国に充滿して恣に誹謗の舌を吐き併せて輕慢の相を現す。之に答うるに人無く、之を誡むるに処なし。諸の俗人は之を信じて帰依を吾が宗に絶ち、諸の初学は之を習って謗心を此の教に堅くす。……凡そ華洛も辺境も皆異国の敵の如く、和州の一寺（興福寺のこと）僅に少水の魚に似たり。……当に知るべし、今時は是れ最後の値遇なり。哀しい哉、慈尊の伝燈余光を挑げんこと、今幾ばくの年ぞ……」

と。『応理大乘伝通要録』上巻、大日本仏教全書、旧版、第八〇巻

三八七頁）

良遍はこうして破滅に瀕している法相宗を甦らせることをライフワークとし、法相教理、因明などを説明する本を多数書きました。ところが、彼の生きていた時代の仏教は一乗思想、一切皆成、悉有仏性を標榜していましたが、これを完全に無視すれば法相宗の再興を断念しなければならぬでしょう。良遍は法相宗の法脈に属した以上、無論法相宗の教理を信じましたが、また鎌倉時代に育った人間である以上、一般社会に普及した一乗思想、一切皆成などの鎌倉仏教の理念にも深く影響された筈です。しかし、これは矛盾を孕んでいるのではないか、鎌倉仏教の一乗思想は法相唯識の五性各別の正反対じゃないですか、鎌倉仏教の一切皆成は法相唯識の無性不成仏説と正面衝突しないのですか、良遍はこんな撞着をどう解決したか、『観心覚夢鈔』を見ましよう。『観心覚夢鈔』に問答がよく出ますが、或る人が良遍に尋ねます。「法相宗は五性各別を唱えている。五性の中には絶対に成仏出来ない無性の有情があります。人間は無性に入っているか入っていないかはその人間の阿頼耶識の中に無漏種子が存在するかしないか、このことによるそうです。その種子は本有、つまり先天的なものですから、最初からなければ成仏出来ない。又、自分の阿頼耶識の中に無漏種子があるかないか、自分で分ることも出来ないから、大変な不安を感じている。し

かし、同じ仏教の余宗、例えば天台宗は一切皆成を約束している。つまり一切衆生が成仏するとの約束だ。法相宗は『解深密経』を所依の經典としているが、余宗は『法華経』、『涅槃経』などに頼っている。『解深密経』と『法華経』は共に同じ金口説法であるから、無性の一類を教える『解深密経』を所依經典とする法相宗の宗徒になるより、一切皆成を高唱する『法華経』に依っている天台宗に帰依すれば、自分の成仏が約束される。」と。その人は極めて合理的な法相宗批判をしています。良遍はこれに答えた。「俗人は確かに自分の阿頼耶識の中に無漏種子が存在するかしないか、知る筈がない。しかしこんな疑問、つまり自分には無漏種子があるか、が起ったら、疑問そのものは無漏種子が存在している証拠になる。無漏種子を欠いている人にはこういう疑問が起らない。一番危ないのは自分は成仏が出来るか出来ないかと全く心配しない人、仏教を一切考慮しない人、無頓着な人だ」と。良遍は非常にユニークな解釈を下しています。良遍の言葉を引用しますと、

「自身の種の有無に於ては、実に以て決し難し。教の権実は此れに依るべからず。……故に設い慳・嫉等の過ありと雖も之を以て忽ちに無姓と定むべからず。……所以に六波羅蜜の相に於て設い一二三等の相を具すと雖も、根本の大心の相を欠かざれば、当に知るべし、即ち是れ菩薩種姓なり。」

(原漢文、大正第七一巻七七頁中)

と正統唯識と異なった新説を出しました。この新説は非正統と云ったら、それまでですが、実際、日本仏教の特徴を現わしています。これは『観心覚夢鈔』からの僅か一例だけです。が、そういう日本の解釈が他にも幾つかあります。ですから『観心覚夢鈔』を単なる法相宗教理の概説書としてではなく、日本唯識の概説書として紹介すれば、意味が充分にあると考え、博士論文の主題に致しました。その全訳を完成したのは昭和四十年で、その翌年、ハーバードから博士号を授与されました。

昭和三十五年ハーバード大学の博士コースに入りました。二年後、突然、ロンドン大学付属のアジア・アフリカ研究所から招聘を受け、東アジア仏教史(日本仏教史、中国仏教史)の講座に任命されました。当時のロンドン大学には仏教を教えている教師は全部で五人で、恐らく欧米には仏教関係の教授陣の一番揃った所でした。インド仏教は、教授が三人いました。その一人はサンスクリット担当のブラフ教授でガーナダーリー・ダルマパダの原典校訂と英訳を出した有名な学者でした。もう一人はフリードマン教授というオランダ系の学者、マドヤーンタ・ヴィバーガチーカー(中辺分別論釈疏)の英訳を出した方です。あとの一人はジャイニ教授というインド人で、当時のロンドン大でパーリ語を教えています。

た。ブラフ教授とフリードマンはもう亡くなられ、ジャイニ教授は現在カリフォルニア大バークレー校で教えて居られ、梵文阿毘達磨論書の権威として知られています。インド仏教を担当していた三人の教授の他にチベット仏教の大家スネルグロブ教授も居られ、ヘーバジラ・タントラなどのチベット仏教関係の貴重な研究書を多く出しました。教師生活を始めたばかりの私はこんな優れた学者と毎日接触して、大変良い勉強になりました。ロンドンへ行く前、専ら日本の仏教・中国の仏教を勉強しましたが、ロンドン大でインドかチベットの仏教学者と毎日付き合って視野を広くする機会を得ました。

私は全部で、六年間ロンドン大学に居り、一九六八年アメリカのエルル大学に移り、新しく出来た仏教学講座を担当することにになりました。未だロンドン大学にいた時、ケンブリヂ大学出版部は『ケンブリヂ中国史』と題する中国歴史叢書を出す企画を発表しました。ケンブリヂ大学出版部は色々な歴史書、例えばインド史叢書、アフリカ史叢書、近東史叢書など、定評のある歴史書を出しています。ケンブリヂ社の企画した『ケンブリヂ中国史』は全部九巻から成る大きな叢書で、その範囲は漢時代から現在までに互っています。勿論中国の歴史は漢に始まるのではなく、殷・周・戦国などの考古学的資料や史書が豊富に残っている時代もあります。ケンブリヂ社の編集者がどうしてそれを度外視して漢代から中国史

を語り始めるか、理解に苦しむ外ありません。ケンブリヂの各種の歴史叢書は政治、制度、財政などを焦点に置いて、宗教、哲学、思想を大体取り上げない編集方針です。しかし、どういう訳か知りませんが、今度の『ケンブリヂ中国史』は依然として政治史に重点を置いているとは云え、珍しくも宗教史や思想史を取り扱うことになりました。『ケンブリヂ中国史』の編集主幹はツイチェット先生という方で、私の当時勤務していたロンドン大学で中国史を担当して居られました。(現在アメリカのプリンストン大学の教授ですが…)一九六七年にツイチェット先生は私に『ケンブリヂ中国史』の「隋唐篇」のために仏教についての一章を書かないか、と誘いました。私は直ぐ承諾しましたが、その後、色々な点について編集者と相談することになりました。編集者は「ケンブリヂ歴史叢書の主眼は政治史になっているから、ワインスタインは隋唐の仏教史を書くに当って、教理や思想よりも仏教と政治との関係、教団と国家との関わり合い、教団の制度史などを強調すれば「隋唐篇」の他の章とバランスが取れる」と云っていました。教団史は私の専門ではありませんが、結城先生がいつも仰しかったように、仏教思想が孤立して成立したのではなく、思想、教理なんかを考慮する時、その政治背景、国家との関係を無視してはならない、と私は信じています。ですから、自分の専門ではないにも拘らず、重

要なテーマであることを認めましたし、又日本のこの方面の学者、例えば道端良秀先生、山崎宥先生、小野勝年先生その他諸先生の貴重な業績がありますから、それを参考にすれば、自分の専門じゃなくても、その章が書けるでしょう。また、よく考えてみると、色々なテーマを中心にした唐代仏教史、例えば、道端先生の名著「唐代仏教史の研究」、山崎先生の力作「支那中世仏教の展開」などがありますから私は観点を變えて、年代順に唐代仏教史を書けば、他にないから幾らか役に立つかも知れないと考えました。また、『仏祖統記』、『仏祖歴代通載』、『隆興仏教編年通論』のような編年体の中国仏教史もありますから、大変参考になるだろうと思いました。

実際に『ケンブリヂ中国史』の「隋唐篇」の中の「唐代の仏教」という章を書き始めたのは一九六七年でしたが、恐らく完成するまで二年掛かるだろうと計算致しました。しかし、その翌年、一九六八年、エール大学に呼ばれて、仕方なく一切ストップ。というのは、ロンドン大学には、仏教学を教えた先生が五人いて、私はその中の一人で、東アジア仏教だけを受け持ちました。ロンドン大学に大学院も付いていませんが、正直に云うと、大学院の仏教の部門は余り活発じゃありませんでした。ですから、教える時間が少なく、自分の勉強するには都合がよかったです。エール大学に移りますと、事情が全く逆だとすぐ分りました。例えば、ロンドン

大学の仏教学の五人の教授陣に対してエール大学は仏教学の教授は私一人です。ですから、自分の専門の東アジアの仏教は勿論、インド仏教、東南アジアの仏教も定期的に講義しなければなりません。専門でない課目なら、準備するのに大変な時間が掛かります。又、ロンドン大学の大学院は活発ではないのに対して、エール大学の大学院は規模が大きく、アメリカ全国、外国諸国から大学生を引き付ける力があります。私は大学院で授業をすること、つまり大学院生を指導することを張り合いのある仕事と思って、喜んでやっています。その反面において、非常に時間の掛かる仕事です。毎年、仏教の博士コースに一人か二人入ります。博士コースの在学期間は別を決まっていますが、平均五、六年です。新しく入る大学院生はエール大学に入る前どこかで日本語か中国語のどちらかを少なくとも三年位勉強したことがある筈です。普通の本なら読む力があるでしょう。（日本語か中国語の読めない人は博士コースに入れません。これから、日本語を勉強することを条件として修士コースに入れます。）こうして新しく入った学生は語学力があっても、東アジア仏教に関する基礎知識が足りないことは普通です。そのわけは中国仏教史、日本仏教史、或は例えば天台の教義とか華嚴の教義などを正しく紹介している英語の本が殆んどないからです。日本語で書かれた入門書はありますが、慣れていない述

語を沢山使っていますから、外国人の初学者は普通の日本語が読めても、こんな概説書が理解出来ません。ですから、私は新しく入った学生と二人で概説書、例えば大野達之助先生の『日本仏教思想史』や鎌田茂雄先生の『中国仏教史』を読み、その術語を一つ一つ説明します。勿論、学生に宇井先生の『仏教辞典』や法蔵館の『仏教学辞典』を買わせ、学生も出来るだけその辞典に出てくる述語の定義を読まなければなりません。大学院の第二年から、学生は仏典の講読を始め、『八宗綱要』、『三論玄義』、『天台四教儀』などの古典を注釈書を見ながら読むことになっています。こんな講義、演習を担当しているのは私だけです。自分の研究時間はロンドン大学勤務時代のそれと比較すれば、非常に縮小されています。

さて、ロンドンで『ケンブリヂ中国史』のための「唐代仏教」の章を書き始めた時、恐らく二年で完成するだろうと考えた私はエール大学に移ったら、今説明した事情のため、その完成が長引くだろうと諦めました。でも夏休み、冬休み原稿の作成に没頭しまして、一九七六年に「唐代仏教」の章を終りました。六年位遅れていたのに、編集者に対して申訳ないとも思いましたが、いずれにしても原稿が漸く完成したことが一つの喜びでした。出来上がった原稿を編集者に渡した時、その遅れていることを何遍もお詫びしました。自分の

原稿がこんなに遅れているため、『ケンブリヂ中国史』の出版が全体的に遅れるんじゃないか、と心配して赤面していましたが、編集の方は「そのことはない、大抵の投稿者は遅れていて、どっちかといえば、ワインスタインが未だいい方だ」と親切に云って、私を慰めて下さいました。もう一つの問題は私の書いた「唐代仏教」の章の長さでした。原稿の作成を引き受けた時、原稿の長さのことを聞きましたが、編集者はたゞ「じゃ適当に」と云って私に任せて下さいました。勿論原稿は単行本の為の原稿じゃなく、本の僅か一章の原稿ですから、印刷した頁から云えば、三十頁か四十頁が一番適切じゃないか、と考へその積りで原稿に取り掛かりました。実際、書き始めると、四十頁は到底無理で、又、編集者も「適当に」という曖昧な言葉を使いましたので、思う存分に書くことにしました。一九七六年出来上って、英文タイプの原稿用紙を数えてみると、なんと六百頁になっていました。編集者にそれを聞かせると、「やあ、それは無理、三分の二ぐらい削りなさい」と恐らくいうだろうと心配しましたが、実際ビクビクしながら原稿を渡しますと、編集者は「長さは大丈夫だ、他の「隋唐篇」の執筆者はかなりオーバーしましたから、「隋唐篇」を二巻に分けます。上巻には政治、経済などの各章、下巻には宗教史、思想史の各章を載せることにしました。」と云いました。

『ケンブリヂ中国史』の第一回配本が漸く一九七八年に刊行されましたが、それは期待した『隋唐篇』じゃなく、なんと『清朝篇』上巻でした。その翌年、一九七九年、『隋唐篇』上巻が出版されたが、その上巻は政治、経済、などの各章を載せ、仏教、道教などの各章が未刊の下巻に廻されていましたので、仕方ありませんでした。一九八〇年に『清朝篇』下巻が刊行され、じゃこれで私の書いた「唐代仏教」の章を載せている『隋唐篇』下巻が次に出ると期待しました。二、三、四、五年立つても『ケンブリヂ中国史』の続刊が一切出ません。なお困ったことには、中国史の研究者或は中国仏教の研究者は私の「唐代仏教」の原稿が出来上っていると聞いているから是非見たい、参考にしたい、引用したい、と私にも、或は出版社にも頼み、コピーを貰ったから、そのコピーがかなり流布していました。ある場合には、出版された論文に「ワインスタイン未刊原稿第四頁」の形で引用されたこともあります。もう一つ困ったことには、原稿が出来上って出版社に渡したのは一九七六年でしたが、その後勿論参考にすることの出来ない学術書が続々と出ていくということです。例えば、フォールテというイタリア人の則天武後の研究、長部和雄先生の『唐宋密教史論考』、中国の張遵騮先生の極めて詳しい「隋唐五代仏教大事年表」などの参考出来なかった研究がありますので、自分の原稿は出版されていない

まま、もう学術的に遅れていると考えたこともあります。こういう心配がありましたので、一九八五年、つまり原稿を出版社へ渡してから九年目、出版社に文句を云って「自分の原稿の載っている「隋唐篇」下巻がどうして未だ刊行されていないか」と聞きました。編集者が謝まって説明し、「下巻には困っています。というのは、ワインスタインの章は九年前に出来上ったんですが、他の執筆者（複数）の章は今完成していない。また、その章がいつ出来上るか分かりませんので、残念なことに下巻の刊行が覚束ない」と云われました。せっかく苦勞して書いた原稿はこれで日の目を見ないでしょうと、がっかり致しました。約一月後、急に出版社の本部（イギリス）の編集部長からの国際電話が入りました。部長の方が云われました。「我がケンブリヂ出版社は九年間ワインスタインの原稿を寝かして、申し訳ないことをしました。原稿は本の章として長い方ですから、章よりも元々単行本にふさわしい原稿ですから、単行本として出したら如何でしょうか」と提案されました。恐らく日の目を見ないだろうこの原稿が急に単行本として刊行される運びになりました。私は喜んで承諾しましたが、「原稿をいつ印刷屋へ回しますか」と聞いたら、「会社の都合で早い方がよい、今から三ヶ月後」と思っている」との御返事でした。九年待たされてから、今度、出版社の気紛れで僅か三月後で活字になる、不思議な世



の中だなあとつくづく感じました。九年間寝ていた原稿を僅か三ヶ月以内に修正するのは無理ですが、私の原稿はもう本の中の一章ではないから、漢字対照表、引用文献表、索引作成などの仕事も沢山ありましたが、出来るだけ注意して修正をしました。でも説明不備なところ、誤解、誤植などが多く残り、誠に恥かしい次第でございます。原稿が『唐代の仏教』の題で単行本として出版されたのは三ヶ月前でした。まだアメリカの本屋で自分の本を見たことはありませんが、驚いたことには、丸善、一誠堂、琳琅閣などの本屋に陳列してあります。日本の能率的社会に驚嘆する他ございません。

内容は日本人には新しいことはあまりないでしょうが、日本の大学で教育された一外国人の中国仏教史観を示しているので、或は面白い所、或は滑稽な所があるかも知れません。やさしい英語で書かれていますから、何卒御笑覧下さい。皆様の御批評を頂ければ誠に幸です。

本当に長たらしい、纏まりのない、脱線の多い話になりまして、申し訳ありません。御清聴下さいまして、有難うございます。